

事業活動実績報告書

施 設 名	幼稚園型認定こども園青鳩幼稚園
教 育 理 念	・あいさつのできる子・明るく、のびのびした子・思いやりのある子・自分から進んで、喜んでやれる子・興味を持ち、努力する子・粘り強く頑張れる子

1 事業名	運動講師による運動遊び
2 実施期間	令和7年 4月 1日 ～ 令和8年 3月31日

3 取組概要	(取組日) 令和7年 4月 1日 ～ 令和8年 3月31日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
	外部の運動講師を招き、発達段階に応じた運動遊びを実施した。走る・跳ぶ・バランスをとる等の基本動作を中心に、サーキット運動を活用しながら遊びの要素を取り入れて展開した。技能の習得や体力づくりにとどまらず、「やってみたい」という意欲や挑戦する姿勢を大切にし、主体性や自己肯定感の育成を図るとともに、友達との関わりを通して協調性やルール理解の基礎を育んだ。	
	(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
	(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
	(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	

効果検証報告書（継続事業用）

施 設 名	幼稚園型認定こども園青鳩幼稚園
教 育 理 念	・あいさつのできる子・明るく、のびのびした子・思いやりのある子・自分から進んで、喜んでやれる子・興味を持ち、努力する子・粘り強く頑張れる子

	事業の区分(5領域)		幼稚園教育要領に示された5領域に該当するもの(複数可。最も当てはまるものには◎を選択してください)				
			健康◎	人間関係○	環境○	言葉○	表現○
計画時	1 事業名		運動講師による運動遊び				
	2 事業概要		学年・クラス毎に専任講師と共に、発達に沿った運動遊びを楽しむ。				
	3 対象学級(クラス名) 対象人数		満3歳児・年少・年中・年長 (クラス名:全9クラス)			215 名	
	4 実施体制		取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況 運動講師1～2名を中心に、走る・投げる・跳ぶといった動きを経験できるような活動を行う。その際に、子どもの待ち時間が長くないように、子ども達への説明は簡潔に行うこととする。各クラスの保育者は子どもと一緒に運動をすることで、子どもの意欲を高めると共に、ケガや参加を渋る子どもが出た際には、その幼児のケアを行う。				
	事業後	4についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 ほとんどの子どもが活動に対して意欲的に参加する姿が見られ、外部講師による取組の効果が確認できた。一方で、個別の配慮を要する子どもが複数在籍するクラスにおいては、担任保育者による個別対応の必要性が高まり、活動全体への関わり方に工夫が求められる場面も見られた。				
計画時	5 事業のねらい		・楽しく元気に体を動かし、運動の楽しさを知る。 ・発達に沿った様々な運動をバランスよく経験する。 ・自分の身を守る能力を養う(ケガや危険から回避する能力の向上)。 ・みんなで運動する時間・空間・仲間のよさを感じる。 ・自ら体を十分に動かそうとする意欲や進んで運動しようとする態度を育てる。 ・自分の体を十分に動かし、子ども自身が体を動かす気持ちよさを感じると共に、体を動かそうとする意欲などを育む。				
	事業後	5についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 自由遊びの時間において、園庭で体を動かして遊ぶ子どもの姿が増加した。特に年度後半には、年長児が自発的にチームや役割を分担し、ルールを守りながらドッジボールやリレー等を楽しむ姿が見られるようになり、主体的に運動に関わる態度や協同性の育ちが確認された。				
計画時	6 取組の内容		計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等 運動遊びを通して、基本的な体の使い方を覚える。運動用具を使用して様々な運動を経験する。プール遊びを通して、水に親しむと共に、水遊びの楽しさや、一方で危険なことがあることを知る。また、運動遊びの中で、集団遊びや用具を活用したサーキット形式の運動を行うことで、更に色々な動きを経験する。 上記のうち、幼稚園教育要領に示された「内容」について、各園で積み重ねてきた取組を発展させた点 進んで戸外で遊ぶ。教育要領には、近年戸外で遊ぶ経験が不足している子ども達が多いとの記載があるが、コロナ禍を経て、より顕著になっているのではないかと。運動遊びの時間には、子ども達が園庭で楽しく、元気に体を動かすことで、戸外で運動する気持ちよさや楽しさを感じ、自由遊びの時間にも、天気の良い日は外遊びをする子ども達が増えている。 (継続事業のみ記入)前年度の取組から発展させた点 園庭だけでなく、積極的に園舎2階ホールも併用して活用することで、サーキット内容のバリエーションを増やすことに繋がり、子どもの多様な動きの経験を増やすと共に、子ども自身が運動遊びができる環境を選択することができる。それが子どもの意欲を高めることに繋がっていくと考える。				

事業後	6についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 運動講師による運動遊びや用具を活用した活動、プール遊びの実施により、走る・跳ぶ・バランスをとる等の基本的な身体動作の安定が見られ、様々な動きに自ら挑戦する姿が確認された。また、水に親しむとともに、安全への意識の芽生えも見られた。さらに、戸外で体を動かす経験を重ねることで外遊びへの抵抗感が減少し、自由遊びの時間にも園庭で遊ぶ子どもが増加した。加えて、園庭とホールを併用することで活動の幅が広がり、自ら活動場所や内容を選択しながら主体的に運動に関わる姿が見られた。これらのことから、本取組は身体機能の向上に加え、主体性や協同性の育成にも寄与していることが確認された。他方で、一部のクラスにおいては、個別の配慮を要する子どもへの関わりを充実させるため、担任の対応に工夫が求められる場面も見られた。今後は、職員間の連携や役割分担を工夫しながら、すべての子どもが安心して活動に参加できる環境づくりを進めていく。
	7 環境構成例	基本的に園庭にて行うこととするが、できる限りホールも活用して行う。体操講師が前に立ち、挨拶・準備運動から始める。各学年や時期に応じて活動内容は変わるが、例えば、年度前半の年長学年の場合、個人運動として講師の動きを真似したり、色々な音や手拍子を聞いて動くなどとする。その他、マットや跳び箱、鉄棒といった用具を使用して様々な運動を経験すると共に、サーキット形式を活用することで、子どもの待ち時間を縮小し、運動量を増やしていく。 担任などの保育者は、基本的に子ども達と一緒に運動遊びを行うが、ケガや活動に入れない子ども達のケアを行う。気分が乗らない子ども達を無理矢理、運動に参加させることは逆効果になりかねないため、様子を見たり、前向きな言葉かけをすることで、子どもが自ら「運動してみようかな」と意欲が沸くように働きかけていく。
計画時	事業後	事業実績から推測される効果や改善点等 子どもたちはそれぞれのペースで、運動講師や友達と関わりながら、楽しんで運動に取り組む姿が見られた。また、サーキット形式の活動においては、複数の運動箇所を設定することで、子どもが分散しながら取り組むことができ、待ち時間の軽減や運動量の確保につながっている様子が確認された。一方で、運動に対して苦手意識をもつ子どもにおいては、活動への参加に消極的な姿も見られたことから、今後は個々の発達や興味に応じた関わりや、成功体験につながる段階的な活動設定などの工夫を行い、すべての子どもが安心して参加できる環境づくりを更に進めていく必要がある。
	8 期待される効果児童の姿	取組を通じて期待される児童の姿や効果等 基本的に子ども達は遊びの中で運動能力を高めていくが、運動講師が意図を持って、今の子ども達に必要な運動の機会を作ることによって、より子どもの運動遊びの幅が広がるのではないかと。例えば、講師による運動指導の際に、ドッジボールの基本的なことを教わった子ども達は、その後の時間にやりたい子ども達が集まり、ドッジボールをして遊ぶ姿が見られている。つまり、運動指導の時間をきっかけにして、子どもの育ちの伸びしろが大きくなることが期待される。
事業後	8についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 運動講師による指導を通して、子どもが経験する運動の種類や遊びの幅が広がる様子が見られた。特に、指導の中で取り入れた活動については、自由遊びの時間にも子ども同士で再現・発展させる姿が見られた。 例えば、ドッジボールの基本的な動きを経験した後は、やりたい子どもが自然と集まり、ルールを共有しながら遊びを展開する様子が確認された。このように、運動指導の時間がきっかけとなり、子どもが自ら遊びを発展させていく姿が見られるようになった。これらのことから、運動講師による意図的な活動の設定が、子どもの主体的な遊びや運動への関わりを促し、遊びを通した育ちの広がりにつながっていることが確認された。
	9 効果検証総括	事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて 運動講師による運動遊びの時間は、運動へのきっかけづくりの機会であると捉えている。重要なのは、その後の時間において子どもが自発的に運動遊びを楽しむ姿へとつながっているかどうかである。そのため、運動遊びの時間においては、説明の時間を必要最小限にし、体を動かす楽しさや気持ちよさを十分に感じられる活動の充実を図っている。サーキット運動等の工夫を取り入れることで、運動量の確保と多様な動きの経験につなげている。今年度は、特に年長児を中心に、自由遊びの時間においてもドッジボールやリレー、鬼遊び等を子ども同士で展開する姿が見られた。さらに、年長児と年中児と一緒に遊ぶなど、異年齢での関わりへと発展する様子も確認された。これらのことから、運動遊びの時間が日常の遊びへとつながり、主体的に体を動かす姿の育成に寄与していることが確認された。今後も、子どもが自発的に運動を楽しめる環境や活動の工夫を継続していく。

※必要に応じて、別紙の添付やイラストの活用などにより事業説明を補足しても構いません(別紙は任意様式)。

※幼児連携型認定こども園教育・保育要領における教育のねらいや内容等については、幼稚園教育要領の5領域から構成されていることを踏まえ、本事業では「幼稚園教育要領」とのみ記載しています。